黄昏からの眺め　その一

みずき　啓

「血液型って何型」と、誰にでも聞きたがる癖は女性に多い。
うんざりしながらも、犬がお尻を嗅ぐようなもんだからと、ぶすっと、「ＡＢ型」
「あっ　ジキルとハイドだ」　相手は喜ぶＡＢ型。
　実は、誕生日はもっと聞かれたくない。
「一月一日」と私。
「ほんとに、ほんとに、一月一日？昔わぁ、十二月うまれはお正月が来るとすぐ二歳になっちゃうもんでぇ、一月一日って、嘘こに役所へ届けたんだって」、小意地悪く私の顔を覗き込む。
ある人は半歩前進
「これはまた、凄い強運の日に生まれましたなぁ。大出世生まれ日と言いましてね、元旦は世を作る人を排出しておる。太閤秀吉・・・・・」止まらない。
他人の誕生日ふぜいでそんなに力が入るかねぇ。
以前、運転免許の更新申請期間は誕生日前の一か月だった。だから私は十二月一日から年末休み前の二七だか二八日の間で、そもそも警察は行きたい所でもなく、気忙しい師走に気を重くしていた。
　その後、申請期間は誕生日の前後二か月となった。
　ところが、今回はコロナ！予想はしてはいたものの、聞くも涙語るも涙の難行苦行の連続だった。
　まず、七月二九日にこれがなくては始まらない申請通知の葉書が届いた。即日、運転教習所に認知症検査を申し込む。直近でなんと三か月先の、十月二八日！ショック。一回目のカウンターパンチ。
　検査終了、一週間後に来た検査結果は九十点。ちなみに、三か月後に出た夫は七五点。七四点から講習費がグッとアップする。行きつけの美容師さんの御年八〇才、中卒の父親は九四点だって。
　認知合格の結果をもらい、即、講習を申し込む。
「あなたの免許証は2月一日までですね。講習は一月二九日です」
二発目のパンチが入った。これでは、怪我も病気もできない、と言うことか。
　講習当日。教習所のエントランス、体温測定機の前

で固まってしまった。あろうことか（係の人に声を掛けて下さい）の数字。自覚はゼロ。熱っぽくなんかない。
向こうにソファに横になっている人がいて、いきなり倒れて救急車を呼んだらしい。スタッフ達に囲まれ、「外国へ行った？最近」などと聞かれている。
今日を逃したら、更新は絶望的か？私は測定機を無視して進んだ。小講習室は定員三人だった。大講習室は八名だったらしい。
　運転の実地テストがこれまたストレスの塊で、前回は脱輪ばかりして、
「ちゃんと、道路を走ってください」と、言われてしまった。
ちゃんと座布団を持って行って、敷きました。お尻の下に。でも、教習所のあの中型車じゃ、前も見えない、横も見えない。推定で走るしかない状態。　しかし、今回は丁寧な教習者だった。
なんとか講習もパス。

　晴れて？警察署に行きましたよ。
二〇何年か前、目の検査にどうしても通らず、
「出直して下さい」
女性警官は薄く笑う。私は、メガネ屋に走った。
　その後、メガネをかけても、メガネを変えても視力検査が怪しくなって、もう五回か六回か？。前々回は検査係が誰にでも同じバージョンを出すので、横で聞覚えたそのままを答えた。前回は聞き耳を立てていたが、係官はランダムにしていたので、実力で臨み、なんとかクリアー。
今回は三つ目もなぜかよく見えた。
申請書を出すと、やはり、
「これ、どうかなぁ。ほら、ここがね」と免許証用の写真を指す。
（またか）気持ちが沈む。夫は毎回証明写真を、採光の良い日に家内の良い場所で、デジカメで撮り、パソコンの各種免許証用のアプリでプリントアウトする。以前、いつもみたいに、旅行先で撮った写真を夫にプリントしてもらった時、（写真用紙もインクも高いんだ）と言われ、その後の私の旅行写真はパソコンの中だけにある。
そもそも、写真代はもったいないと、新婚旅行の写真はない。
我が家の金融資産額はずっと、日本の全世帯上位二％の富裕層にあたるが、内実はこんなもの。今日、資産

ゼロが全世帯の五，六％である。
警官の指先は写真の頭上にある。顔の上の空白部分が一ミリ狭いと言う。つまり、顔が心持ち大きすぎるらしい。彼の出してきた凡例紙を見ると、確かに顔が少し大きい。同じ日に少し薄着に着替えて撮った別の写真を出してみた。
「あぁ、こっちの方がいいですね」
係官と背中合わせに仕事をしていた女性警官が、くるりと乗り出して来て、
「これは別の日に撮ったものだね。そっちと髪型が違う」
「同じ時に髪の毛を耳に挟んで映しました」と私。
「化粧も違う」（ンな訳ないじゃないか。着替えただけだよ。善良な？市民にイチャモンを付けるのが警官の仕事か）
係官は彼女へ、口を出さないでと体をゆすり、
「一応、センターの方へおくりますから。センターの方からクレームが来ましたら連絡します」と、いつも聞かされる、締めくくりのセリフ。
パソコンからのプリントは認められてはいるものの、私的にはすんなり受理されたためしがない。粒子が荒いだの、背景の色がどうだの、と必ずトラブルになる。
そもそも、プリントを持ち込む人は一度しかみたことがないが、ガタイのでかい押しの強そうな男だったら、当たらず触らず私の対応するのではないか？
私はこの攻防がいやで、証明写真代も惜しむ夫が恨めしい。二月生まれの夫は、毎回、私の結果を参考に修正している。また、どうでもいい細かいところをほじくりたがる警官も警官だよ。もっとほかにすることが有るだろう。
免許証写真の一ミリ二ミリがなんだ。そんなことやってるから、戦争に負けるんだ。
戦いすんで、日が暮れて。
かくして、私の六か月にわたる、免許証更新大戦争は勝利のラッパが鳴った。
あーあ、人にイチャモンつけられない、コワモテする容姿が欲しい。
何かと、見知らぬ他人に小突かれっぽい人生なんだよなあ。